



福崎町立  
柳田國男・松岡家記念館  
〒679-2204  
神崎郡福崎町西田原  
1038の12  
電話：0790-22-1000

### 雑誌『民族』にみる

## 國男の資料採集への思い

柳田國男は、雑誌とは民俗学の研究発表の場であり、研究者の組織化を行うための拠り所として重要であると考えていました。しかし、雑誌の刊行を続けていくことは容易ではありませんでした。『記念館新聞』第60号でお伝えしたように、雑誌『郷土研究』は大正6年(1917)3月に休刊となります。この体験によって、國男は新たな雑誌の刊行に踏み切れない心境となります。

國男と岡とを引き合わせたのは、岡村千秋(鼎の次女茂子の婿)でした。岡にとって、岡村は郷里の長野県松本市の中学の

の先輩だったのです。

そして、國男と岡を含めた5人の若者が発起人、編集委員となつて、新雑誌『民族』がスタートしました。この雑誌では、民俗学だけでなく、他の分野の研究を受け入れる柔軟な編集方針がとられました。そして、國男は地方からの資料報告の充実に力を注ぎます。

國男は、地方からの資料にはすべて自分で眼を通し、記述が正確でないものは採用せず、少しでも不審なところがあれば、手を入れて書き直していました。

このような編集態度の厳しさから、報告者たちの間にも不満が広がっていきます。さらには、國男と岡をはじめとする5人は編集上

の意見が対立します。

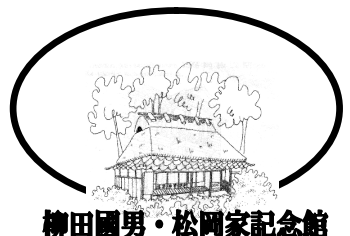
そして、國男が一方的に編集から手を引いてしまい、『民族』は昭和4年(1929)4月に休刊することになったのです。

國男が厳しい編集態度をとつたのは、当時の歴史研究では、人々の口伝えや習慣習俗などを資料として顧みることはなく、しかもこうした資料を基にした國男の学問が好事や道楽と評されていたからでした。

つまり、國男の新しい学問を築くという熱意とそれゆえの厳しさでした。けれども、多くの人々が、國男の真意を理解することが難しかったので



『民族』第1巻第1号



柳田國男・松岡家記念館

### 名作著書紹介

## 故郷七十年を 読む

國男は『故郷七十年』で雑誌『民族』について「岡村千秋が編集名義人になって『民族』という雑誌を出していた。人類学の岡正雄君の兄の岡茂雄君の本屋であったが、実際は渋沢敬三君がポケットマネーを出して助けていた。表紙に一回一回、植物の絵を入れたりして、なかなかいい雑誌であった」と記しています。

岡正雄の兄である茂雄は大正13年(1924)に人類学関係専門の出版社岡書院をつくり、ここに『民族』の発行所が置かれました。『民族』の財政は、國男の出資に頼らず、岡書院の経営による独立採算の形で出発したよう

### ☆☆入館案内☆☆

☆開館時間  
9時～16時30分  
(入館は16時まで)  
☆休館日  
月曜、祝日の翌日  
12月28日～1月4日  
☆入館料  
無料

ですが、資金難になります。そこで、岡書院の経営を援助し、『民族』のスパンサー的役割を果たしたのが、渋沢敬三でした。渋沢敬三は、渋沢栄一の孫であり、このころ横浜正銀行のロンドン支店勤務を終えて帰国したばかりでした。

渋沢と國男は面識があり、資金援助についても事前に話がまとまっていた。そのため、茂雄が大正14年(1925)の暮れごろに敬三を訪ねると、すぐに資金援助を申し出てくれたといえます。

敬三は動植物の標本、化石、郷土玩具などを収集し、整理、研究などを行う「アチック・ミューゼウム」を運営し、様々な調査研究の援助を行いました。つまり、学問の発展と多くの研究者の支援を行った人物なのです。



### 館日記

第34回山桃忌が、8月3日(土)と4日(日)にエルデホールで開催されました。3日は、式典に続き、『播磨国風土記』をテーマとした、紙芝居や基調講演、そして国際日本文化研究センター所長の小松和彦先生による記念講演が行われました。

また、シンポジウムでは、奈良大学の上野先生、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの坂江先生、嶋田町長による討論に加えて、客席からも質問が相次ぎ、熱意あふれる場となりました。4日には、石見神樂が上演され、大変盛り上がりしました。多くの皆様にお越しいただき、ありがとうございました。



いわみかぐら やまたのおろち  
石見神樂 (八岐大蛇)